

## ワークショップ 2

### 「コミュニケーションの諸相」

#### (趣旨)

コミュニケーションというと、(i)健常な、(ii)成人の、(iii)母語話者による、(iv)音声によるコミュニケーションが中心であり、ことばの研究においてもその分野に研究が集中している。しかし私たちのコミュニケーションはそれだけではない。母語話者の中には子供もいるし、様々な障害を持つ人もいる。また外国語として日本語を学ぶ人（日本語学習者）もいる。さらには音声ではなく文字や手話によるコミュニケーションもある。一口にコミュニケーションといってもその実態は多様であり、潜んでいる問題もまた多様である。本ワークショップではこのような様々なコミュニケーションの実態を探り、そこに潜む問題点を検討することを目的とする。

#### (各タイトルと発表要旨)

≪石黒圭（国語研）≫（日本語教育）

##### ■タイトル

「日本語学習者のフィラーが母語話者に与える印象」

##### ■発表要旨

学習者の日本語による発話で、話している言葉自体は日本語、間に挟まるフィラーが学習者の母語ということがある。そうした母語由来のフィラーが日本語母語話者にどのような印象を与えるのかについて、本発表では検討する。

具体的には、中国国内の大学の日本語学科で学ぶ日本語学習者 17 名が、入学後に日本語をゼロから学びはじめ、日本留学を経て、卒業するまでの 4 年間の学習過程において、フィラーの使用が変化する段階を踏まえ、学習過程の各段階で使用されたフィラーを日本語母語話者が聞いたとき、どのような印象を持つのかを分析した。

分析の結果、学習段階を経る中国語を耳にする機会の少ない者のほうが、中国語母語話者のフィラーにたいする違和感が強いこと、また、そうした違和感は学習者の学年が上がるにつれて減少することが明らかになった。さらに、フィラーにたいする印象は、フィラー単独ではなく、発話の流暢性にも左右されることがわかった。

≪市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院）≫（手話言語）

##### ■タイトル

「自然言語としての日本手話」

##### ■発表要旨

自然発生的であれ人為的であれ人工言語としての「手話」はたしかに存在する。だが、そのような人工的な「手話」は、いったん「母語化」すれば、ピジンからクレオールが生まれるように自然言語に生まれ変わる。18～19世紀にかけて世界中で人工的な「手話」による教育が試みられたが、教師が与えようとした「手話」と子どもたちが生み出した手話言語の隔たりは大きく、そのことが結果的にろう教育に「手話の禁止」という不幸な歴史をもたらした。その後、あらゆる「手話」を排除したろう教育は「コミュニケーションの貧困」を招き、それが「言語の貧困」を招いた。20世紀後半にはその反省から「コミュニケーションが豊かになれば、言語が豊かになる」という幻想のもと、「手話」によるアプローチが復権した。しかし、手話言語を母語として位置づけたバイリンガル・アプローチはいまだ限定的である。そのような背景を踏まえたうえで、自然言語としての日本手話をめぐるコミュニケーションの問題を論じる。

≪高田智和（国語研）≫（文字コード）

■タイトル

「文字コミュニケーションの不通」

■発表要旨

現代社会では文字によるコミュニケーションが日常的に行われている。「熊に注意呼びかけを」といった二通りの解釈を許容する曖昧文は、音声言語だけでなく文字言語においても発生し、文字コミュニケーションの不通や誤解につながる。一方で、書記手段の変化によってもたらされた不通や誤解もある。かつては携帯電話の絵文字、ハングルや中国簡化字がメールで適切に通信できないことがあった。これは文字コードによる起因するいわゆる「文字化け」であり、文字コミュニケーションの不通や誤解につながる。「鶯」が「鶯」に、「藪」が「藪」になるような、漢字字体に関する気づきにくい「文字化け」もある。本発表は、文字コミュニケーションの不通・誤解につながる文字コードの仕組み・変遷について述べる。

≪藤野博（東京学芸大学）≫（発達障害児）

■タイトル

「自閉スペクトラム症の認知特性とコミュニケーションの問題」

■発表要旨

自閉スペクトラム症（ASD）は、発達障害の一種で、社会的コミュニケーションの困難と強いこだわりを特徴とする。言語面の特徴としては、エコラリア（反響言語）と語用論的側面の問題がある。語りにおいて中心となるテーマの説明が不足するなどナラティブの問題もある。また、語用論的側面のみならず、我々が現在行っている調査では音韻カテゴリー認知に定型発達児との質的な違いがあることも明らかになりつつある。これらの問題は、ASD者の認知特性からある程度説明できる。特に、知覚された情報を文脈に統合し全体の意味を把握する機能である中枢性統合の弱さとの関係が指摘されてきた。細部への過度の注目、いわゆる「木を見て森を見ない」認知の傾向である。その一方、近年、神経多様性

(neurodiversity) の概念が注目されるようになった。この考えによると、ASD の認知や言語の特徴は病理や障害としてでなく選好性や様式の問題として捉え直すことができる。そのような新たな観点も含め、ASD の言語とコミュニケーションの問題についてあらためて考えてみたい。

《プラシャント・パルデシ (国語研)》 (日本語文法)

■タイトル

「世界諸語から見た日本語のコミュニケーション」

■発表要旨

五感で外界を把握し、それを言語で表現してコミュニケーションすることは万国共通である。しかし、コミュニケーションの方法は言語によって異なることも事実である。本発表では「ナル型」または「状況中心」の表現（「ベルト着用サインが点灯しました」）、受動表現（「上司に叱られた」、「雨に濡れてずぶ濡れになった」）および名詞修飾表現（「太る食べ物と痩せる食べ物」）を取り上げ、世界諸語との対照を通じて見えてくる日本語のコミュニケーションの特徴について報告する。